

九州支部の活動状況について  
「九州支部大会(沖縄)の開催に向けて」

九州支部長 西野吉彦(鹿児島大学農学部)

2019・2020年度九州支部長ということで、日本木材学会九州支部の運営に携わることになったのですが、2019年度の最後になって、コロナ感染症による影響を大きく受け、通常のスケジュールがほとんどこなすことができなくなりました。なかでも、2020年11月に沖縄で開催予定であった支部大会を中止せざるを得なかったのは、支部の存在意義を問われるほどの大きな出来事であったと思います。

例年は、9月の初旬から中旬頃に支部大会を開催することが多かったのですが、沖縄で開催するとすると、台風が接近する確率が低い11月が適当であろうという支部大会実行委員長のご提案で、支部大会開催の準備がなされていました。確かに、9月に開催となると台風の影響を受けやすく、私自身も以前、沖縄滞在中に台風の直撃を受け、那覇市内で延泊することになったことがあるので、実には的確な開催時期の設定であると思います、開催されることを楽しみにしていました。令和2年度の沖縄での支部大会が中止となってしまったのは、まことに残念なことでしたが、令和3年度も支部大会を沖縄で11月に開催することが支部総会で了承されました。その頃までにコロナ感染症が収束し、無事、支部大会が開催できることを願って止みません。

コロナ感染症の影響が大き過ぎて、気分が滅入るような話題が多いので、ここではあえてコロナの話題には触れずに、沖縄と木材の話を書いた雑談風を書いていこうと思います。沖縄の木造住宅の構造材として特徴的な樹種の一つが、「イヌマキ」であることは、多くの人が指摘するところですが、イヌマキは沖縄では「チャーギ」などと呼ばれているようで、その心材は強い抗蟻性を示し、シロアリの活性が高い琉球諸島において、住宅の構造用材、特に柱材として利用されていたということです。ところが、イヌマキは沖縄に多く自生していたわけではなく、現在では、沖縄でイヌマキの丸太は全く生産されておらず、戦前においても多くのイヌマキ材は、鹿児島や宮崎から移入されていたとのことです。鹿児島ではイヌマキは「一つ葉」(ヒツバ、鹿児島人の発音は「ヒツパツ」と聞こえる)と呼ばれ、生垣や防風林、並木道が多数見受けられます。知覧の武家屋敷群のイヌマキの生垣や並木は、きれいに剪定され、独特の景観を造り出しています。

話は少しずれますが、2020年夏にイヌマキにとっての害虫であるキオビエダシャクという蛾(ガ)の仲間が鹿児島市内で大発生しました。キオビエダシャクの幼虫はいわゆるシャクトリムシで、イヌマキの葉を食害します。成虫は、全体的に濃い紺色で、羽に黄色の帯がある美しい蛾で、昼間飛び回ります。私、個人的にはキオビエダシャクは「綺麗な蛾だなあ」と思っていたのですが、多くの人々にとっては「気味悪い蛾」だそうで、薬剤で駆除されていました。私の息子(高校生)も大の昆虫嫌いで、「自転車置き場に蛾がいる一、無理、無理、無理！」と言って、私に蛾を追い払うよう頼んでくる始末でした。

話を沖縄の木材のことに戻しますが、沖縄では、住宅などの木造建造物用の構造用材を県内で

調達することは事実上、不可能なのです。先般、残念ながら焼失した首里城を再建する際には、多くの木材を調達する必要がありますが、そのほとんどを県外から移入、ものによっては海外から輸入することになるのです。イヌマキについては、鹿児島においても大径材をまとまった本数調達することは極めて難しいでしょうから、おそらく他の木材で代替されることになると思います。

沖縄では木材を自給できず、県外からの調達に依存しているわけですが、鹿児島についても同様なことが言えます。この度、鹿児島市にある鶴丸城の「御楼門(ごろうもん)」が再建されましたが、その材料となる木材の多くが、他県から調達されました。特に、ケヤキの柱材は、調達するのが極めて困難で、岐阜県などからもケヤキの大径丸太の寄贈を受けたそうです。「適材適所」という言葉もあるように、良いものを作るためには、その用途に最も適した材料(木材)を入手して利用することが昔から行われてきて、現在でもその営みが変わらず引き継がれていることを実感します。

何よりも令和3年11月の沖縄での九州支部大会が無事開催されるよう祈るばかりです。開催された際には、沖縄にある重要文化財の伝統的な木造住宅を見学したいと思います。